



小説 窓の下

永代美知代

涼風の立ち初めた九月の新学期に應はしい、生々
と、思ふ事も無げな少女達は、眼の覺るやうなメリ
ンスや、伊勢崎錦仙の振長い袂を纏へして、夕方の
學園を、思ひくりに打ち連れて飛び廻つて居るので
す。二ヶ月といふ永い休暇の間を、互に遠く別れ別
れになつて居た親しい同志は、話しても話つても、
云ひ盡せない、聞き切れない、深山な／＼語話があ
るのでせう。ドツと聲を立て、華やかに笑ふかと思
れば、肩を打ち合つて懐かしげに微笑み交す。

「アラ清水さんだ！清水さんが歸校てらつした！清
水さん！清水さん！」
眼早く見つけた一人が駆け出すと、皆なもその後
に續いて狂人のやうに走つて迎へます。車夫に行李
をかつかせながら、木陰涼しい高座を此方によつて
來る少女の顔は輝いて、パツタリ寄り添ふと、突然
手を執つて、堅く烈しく握つて打ち振りました。

「ブラボー！」

「嬉しいのねえ！」

今の先刻知り合ひの牧師に連れられて、その周旋
で學院の學僕に住み込んだばかりの彌生は誰一人知
り顔も無く、口を利いて呉れる人も無い寮の窓にも
たれて、斯うした光景を見て居ると、まるで鬼界ヶ
島に取残された倭寇僧主でもあるかのやうな、
悲しい心細い氣持になつて、羨んでも仕方無い事
とは知りながら、眼の前の人達が妬ましい思ひをし
たり、つい昨日別れて來たばかりの戀しい、戀しい
兄様の上を考へ込んで、何時ともなく誤合んで居ま

したが、堪らなくなつて眼を伏せました。

「誰？生徒なの？」

「否、そんな事なくてよ！」

聞き馴れぬ

異國の言葉

に、彌生は我

ともなく頭を

持ち上げまし

た、

「アラ、矢張

り生徒の方だ

つたわ私！」

英語や佛蘭

西語を話す人

とさへ云へ

ば、すぐもう異人

てなくてはならぬもの、やうに思

ひなして居た田舎者の自分が氣恥しく、彌生は顔を

赭らめてすぐ又俯向きました。



「誰かになさいよ！」
斯う遠葉な聲が聞えて、人々は庭の木陰へ身を避
けました。

「まさか佛蘭

西語は解りつ

こなくつて

よ！」

「だつて此方

を見て變な容

子をした事

よ！」

「大丈夫、恥

しかつたんだ

む乾度、だつ

て學僕なのよ

あの方！」

「さう、あなたあの方を知つてるの？」

「おゝ、嫌だ、まさかねえ！」

聞えない積りてせう、彌生に解らない佛蘭西語をよして、今度は日本語で話すのでした。

「御免なさい、さう云ふ意味にお取りなすつちや困るわ、だつて學僕だの何だのつて、あなたが餘りよくあの人の事を御存知なのですもの、私だつてまさかあなたの交友達だなんて思つたのぢやないのよ」

「好いわ私、どう思はれたつて構やしない」

「アラお怒りなすつたの？」

「フ、ただけど全く可哀相だわねあの人、随分苦學しさうな様子をしてゐてねえ」

「あんなて居て學校に來なかつたつて好いでせうに！着物だつて何だつて一寸とまア御覽なさいよ」

彌生はそのまゝ何處かへ消えても行き度い恥しさを取じて、思はず洗ひ酒しの浴衣の袖をまさぐりました。

て、どれも皆な美しい。立派な銘仙物か、でなければ思ひ切つて氣の利いた、喰ひつき度い程すつきりした柄合のメリンス友誼の浴衣なんぞを着込んで、風に吹かせた夏リボンにも贅を盡し、彌生のやうに田舎で貧しく育つた者の眼には、何だか勿體ないやうな氣も致します。

「イギリスをやる積りてせうか、それとも私達と同じに佛蘭西語かしら？」

「あんな方——なんて失禮か知らないけど、あんな方イギリスをやつた方が將來の爲めに好いわねえ」

彌生は最う坐にも耐まません、無論誰から顔を見られて居る譯でもない、先方の話聲を此方で聞いて居るだけで、先方の人達は、彌生が此處に斯うして居る事さへ忘れてゐるのかも知れないけれど——

彌生はそつと音を立てないやうに、忍びやかに窓際を離れました。とドツと大きく彼方の木陰から、彌生を追つかけてもするやうな、烈しい笑ひ聲が聞えるのでした。

「嫌だ——」

立つたまゝ部屋の間つこの壁にもたれて、毒と袂を顔に押し當てました。熱い涙が湧いて流れて、悲しさが潮のやうに込み上げて参ります。

五分——十分

泣いて居る間に色々な事が思ひ浮かびます。

「この娘はもう、勉強さへ出來ると云ふ事なら、どんな苦しい働かでも喜んで致します。

お庭の草むしりでも、お部屋のお掃除でも——ねえ彌生さん」



親切な教師が斯う、しんみりした調子で、スタンホルド校長の前で自分を呼びかけたその言葉が、今でも明瞭耳元にこびりついて居るかの心地がして、彌生は耐らなく、自分と云ふものはかない、物機れなものに思はれてなりません。

「袴だつてないんだもの、皆様皆なお綺麗に揃つてらっしゃる中に、私一人がこんなクタクタの帯なんぞし

て——」
彌生は教場へ出た時のみまぼらしさを考へると、

恥しさを通り越して、いつそ腹立しいやうな道無
さを感ぜないでは居られません。泣きめだつた眼を
擧げて、壁にもたれたまゝ、じつと一つ處を見定め
ました。

はげちよろけの紺緋の單衣に、よれ／＼になつた
やうなメリンスの古ぼけた帯を結んで、たつた一人
だけ袴姿の一同の中にあつた自分の姿が、まるで他
々の人でも見て居るかのやうに、彌生の眼の前に現
はれますと、彌生は身を慄はして、又もや袂を顔に
押し當てました。

此室は寮の中でも、とりわけ汚らしい部屋なので
せう、茶色になつた畳は三疊より敷へられませんが、
押入れも何にも無く、夜の物は隅つこの方へ出しつ
放して置かなければならぬやうな話しです。それ
でも彌生の注意で、白い敷布を覆つて、見苦しくな
いやうにした蒲團の直ぐ傍に、小さな竹の簾代の行
李が一つ並んで、如何にも玄關番や學便の居るやうな
光景です。ですから彌生が嬉れしく思つたのは

庭の方を向いて、たつた一つ附けられた板垣窓に、
可憐なきづたがからんで、やさしくなつるを延べて
は竹格子の内に入り込んで来る事でした。

「何ぞ可愛いきづたでせう、きづたよ、きづたよ、
あなた私の友達ねえ」

斯う口に出して云ひながら、彌生はその窓の下に
机を据えました。机と云つても、ほんの小さな、學便
から貸して頂いた、昔の寺小屋にでもありさうな貧
弱なものです。彌生はそれでも満足して、都に名
高い學院の生徒として、たとひ學便であらうが何
であらうが、今日から此處に書物を讀む事が出来る
嬉しさを、沁々喜んで居たのです。

それが派用やかな少女姿の、睦しく賑やかな様子を
見て居るうちに、つい今の自分の身の上が悲しくな
つて、はかない／＼氣持に引き入れられて了つたの
でした。

「何ぞ私は馬鹿なんぞでせう！
やがて彌生は思ひ返す事が出来ました。

「斯うくの手紙だ、お前を人差に感服させる程の世
界はないのは、此兄に取つてもどんなに苦痛だか！
併し、併し何事も運命だ、よく辛抱して勉強して居
てお呉れ、そのうちには兄様だつて、何時までもお
前を學便で置く氣はないんだから、ねえ彌生さん」
出發の前夜、大阪の詫しい裏屋で斯う兄様から云
はれた言葉を、彌生はどうして忘れる事が出来ませ
う。「え、もう、私は勉強が出来るんですもの、皆
々／＼兄様の御恩ですわ、早く親に死別れた私達が、
どうして女學校になんか行かれるもんですか、私は
幸福よ、本當に幸福ですわ彌生がこれだけ云つて涙
の眼を打伏せました、兄様も黙つて腕を組みました。
兄様は今大阪某新聞の記者で、望める將來を持
つた人ではあります、月給の高も多きはありませ
ん、彌生と二人で細々つまいい暮しをしてゐたけれ
ど、彌生が行つた後は、又一人安下宿の二階に淋し
い生活にかへりました。兄様も淋しいわ！」と彌

生はやたら手紙を書き度くなりついと立つて机の引
出しを開けました。そして書筒箱と置かれたポリー
の箱を開けると、美しい色刷の、名刺形の寫真繪
が幾つともなく、ハガキや巻紙と一緒に入り交つ
て入れられてありました。彌生はその寫真繪の一つ
一つを丁寧に描へながら、じつと見入つて居ました
が、終にはポトリ、ポトリ大粒の涙を落し初めまし
た。それは云ふに云はれない、嬉しい懐かしい思ひ
出を持つた寫真繪なのでありました。彌生がまだ幼
くて、母も無い遠い作州の山陰に、父様と唯々二人
で淋しく暮して居ます時、その頃東京へ出て苦學し
ながら、新聞社のボーイに仕込んで居た兄様から、
彌生を喜ばせようとして、わざ／＼送つてよこしたも
のでした。そして兄様は編輯局に落ち散つた西洋煙
草の空箱を探して、丹精にその中から拾ひ集め、拾
ひ集めたのです。「兄様！彌生は到頭堪らなくな
つて泣き伏しました。(完)